

論理を組み立てる

テーマ（論題）に対する自分の考え

クラスごとにディベートのテーマ（論題）が決まったら、まずは、生徒一人一人に、自分が考える立場とその根拠を書かせます。そうすることで、肯定側チーム、否定側チーム、司会者、判定員、いずれになったとしても、ディベートのテーマに対して問題意識をもつことができます。ディベート・マッチへの意欲付けを図ることもできます。また、チーム編成やチームでの立論作成にも役立てることができます。

ある生徒は、「治らない病気を患者に知らせるべきか」に対しては、肯定側に立って考えていました。その根拠は、次の通りです。

- 自分の病気を知っていれば、残された時間を有意義に過ごすことができるから。
- 何の病気かわからず、何だか心残りです。死ぬよりは、自分の病気をわかって納得して気分がスカッとしてから死んだほうが、患者も早く死ねると思う。
- 自分の病気を知ってショックかもしれないけれど、そのショックを乗り越えたことで、自分が強くなることができたのなら、病気の進行も遅くなるのではないかな。

チーム内で各自が立論の草稿を作成する

チームで立論を作成するために、まずは、チームのメンバー各自で草稿を作成します。ある生徒は、「消費税は必要か」の否定側のメンバーの一人として、次の草稿を作成しました。

私が消費税は必要ではないと主張する根拠は3つあります。

その第一は、私たち子どもから消費税をとるのはおかしいということ、第二は、3%ばかりをいちいち払うのはめんどろだということ、第三は、他にもっとよい税金の取り方があるだろうということです。

このような草稿が4名分集まれば、かなりの情報となります。そこから、チームとしての立論作成へと進めることができます。

チーム内での役割分担

チームのメンバーが4名だとします。立論をみんなで考えて書くというのは現実的ではありません。一人のメンバーが4名分の草稿と集まってきた情報カードや資料をもとに書くことになります。

“ディベートの華”である反対質問は、2名のメンバーが担当します。こちらからの質問を考え、相手チームからの質問を予想し、その答えまで準備しなければなりません。時間には制限があるため、どの質問から始めるのかなど、順番も考えておく必要があります。また、この2名は、相手からの質問に答える主要メンバーとしての役割を果たすことになります。

最後の一人は、最終弁論を担当します。中身は立論よりは短くなりますが、コンパクトに、説得力をもって力強く訴えなければなりません。重要なポジションです。